視線の送り手の道徳違反が注意誘導および選好判断に与える影響

白井 理沙子　関西学院大学大学院文学研究科
小川 洋和　関西学院大学文学部

道徳違反を行う人物の挙動は、集団や自己への脅威を回避するための有効な手がかりとなる。本研究は、視線の送り手が持つ道徳違反に関する情報が注意誘導およびその後の選好判断に与える影響を検討した。人物の情報操作のため、特定の顔画像と情報（道徳違反/道徳遵守/中性）を繰り返し対呈示する手続きの後、視線手がかり課題を実施した。視線手がかり課題では、特定の情報を意味づけた顔画像の視線移動方向と一致もしくは不一致した位置に物品（キッチン用品/文房具）が呈示された。参加者は物品のカテゴリを判断し、視線手がかり課題の最後のブロックでは、加えて物品の好ましさも評価した。その結果、全体として視線による注意誘導および視線方向の物品に対する選好の上昇が認められた。しかし顔画像と関連した道徳違反のサブカテゴリ (転覆・危害・欺瞞・堕落・背信) ごとに、視線による選好の変化を確認した結果、一部のサブカテゴリ（転覆・堕落）と関連した視線は選好に影響する一方で、危害・欺瞞・背信と関連した視線は選好に影響しなかった。これは視線の送り手の道徳違反の種類により選好判断に異なる影響を及ぼすことを示唆している。

Keywords: morality, gaze cueing, liking effect.

問題・目的

道徳違反を行う人物を素早く検出し、その挙動に注意を向けることは、集団や自己への脅威を回避するのに役立つ。Haidt (2001) は、ヒトが進化の過程で異なる 5 つの道徳基盤と呼ばれる認知モジュール（権威/転覆・ケア/危害・公正/欺瞞・神聖/堕落・忠誠/背信）を獲得し、それに基づいて道徳的判断を行うようになったとする道徳基盤理論を提案した。この理論から考えると、道徳違反となる他者の行動を効率的に認識するために、各道徳基盤に特有の知覚・認知処理が存在している可能性がある。そこで本研究では、5 つの道徳基盤のそれぞれと関連した道徳違反を犯した人物の視線移動が私たちの認知処理に与える影響を検討した。

これまで他者の視線の移動は、観察者の注意を誘導し (視線手がかり効果)、さらに視線方向に位置する物品の選好を上昇させる可能性が示唆されてきた (Bayliss, Paul, Cannon, & Tipper, 2006)。本研究は、視線の送り手に道徳違反に関する情報を連合させることによって、道徳違反を犯した人物の視線が、注意誘導や選好判断にどのような影響を与えるかを検討する。

方法

実験参加者　実験参加者は20名（男性6名　女性14名）であった。平均年齢は20.40歳、年齢範囲は18～28歳であった。

実験刺激　Chicago Face Database (Ma, Correll, & Wittenbrink, 2015) から顔画像30枚を使用した。短文を3種類（道徳違反/道徳遵守/中性）各10文作成した。道徳違反の10文は、転覆・危害・欺瞞・堕落・背信の5つの道徳基盤のカテゴリに関連するものであった。標的刺激としてキッチン用品および文房具の画像を各120枚準備した。

実験手続き

連合課題　短文が持つ情報を顔画像の人物に意味づけるために、特定の短文と中性的な顔画像とをペアにし、1ペアにつき4回繰り返し画面上にランダムな順番で呈示した (Figure 1)。実験参加者の課題は、短文の内容を呈示された人物が行っているところをイメージすることであった。

視線手がかり課題　連合課題の終了後、視線手がかり課題を実施した (Figure 2)。顔画像を画面の中央に呈示し、1,500 ms後に顔画像の視線が右と左どちらかに移動した。視線の移動から500 ms後に視線の方向と一致した位置、もしくは不一致な位置に物品が呈示され、参加者はその物品がキッチン用品か文房具かをキー押しで判断することを求められた。一致した位置に物品が呈示される条件を視線一致条件、不一致な位置に呈示される条件を視線不一致条件とした (Figure 2A)。また、顔画像と連合した情報によって、顔画像のカテゴリを道徳違反・道徳遵守・中性の3種類に分類した。本試行は720試行であり、3ブロックに分かれていた。

第3ブロックのみ、物品のカテゴリの判断を行った後、物品の評価課題の画面が呈示された (Figure 2B)。

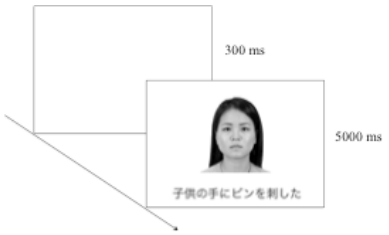

Figure 1. 連合課題の流れを示す。

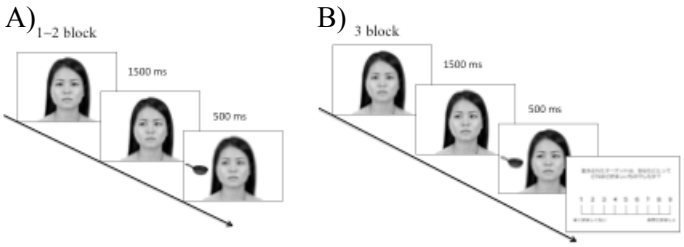

Figure 2. 視線手がかり課題の手続きを示す。A) 視線手がかり課題の 1~2 ブロックの流れを示している。実験参加者は呈示された物品のカテゴリ判断を行う。B) 視線手がかり課題の第 3 ブロックの流れを示している。実験参加者は呈示された物品のカテゴリ判断を行った後、物品の好ましさを評価する。

画面上には1.「全く好ましくない」~9.「非常に好ましい」というラベルが呈示され、参加者は直前に呈示されていた物品の好ましさを評価した。

結果と考察

視線一致・不一致条件における顔画像の種類ごとの平均反応時間を算出し、顔画像の種類 (道徳違反・道徳遵守・中性) による視線手がかり効果への影響を確認した。その結果、すべての顔画像の種類において視線手がかり効果が生起し、その効果量は条件間で違いがなかった。これは、顔と連合させた情報は視線による注意誘導に影響しないことを示している。

Figure 3Aは視線一致・不一致条件における顔画像の種類 (道徳違反・道徳遵守・中性) ごとの物品の好ましさの程度を示したものである。視線による選好の変化が顔画像の種類によって異なるかを確認した結果、全体として視線方向の物品に対する選好の上昇が認められ、その効果量は条件間で違いがなかった。しかし、視線による選好の変化を道徳違反のサブカテゴリごとに確認した結果、一部のサブカテゴリ（転覆・堕落）と関連した視線は選好に影響する一方で、危害・欺瞞・背信と関連した視線は選好に影響しないことが示された (Figure 3B)。これは、人物に連合させた道徳違反の種類によって、人物の視線が選好判断に及ぼす影響が異なっている可能性を示しているといえる。

結論

本研究の目的は道徳違反を犯した人物の視線が私たちの自動的な注意誘導および選好判断に与える影響を明らかにすることであった。その結果、人物に与えられた道徳違反に関する情報に関わらず視線手がかり効果が観察された。また、転覆・堕落の道徳基盤に関わる違反を犯した人物の視線は選好を上昇させた一方で、危害・欺瞞・背信に関わる違反を犯した人物の視線によっては選好の上昇が引き起こされなかった。これらの結果は視線の送り手の道徳違反の種類によって私たちの選好判断に及ぼす影響が異なっていることを示している。

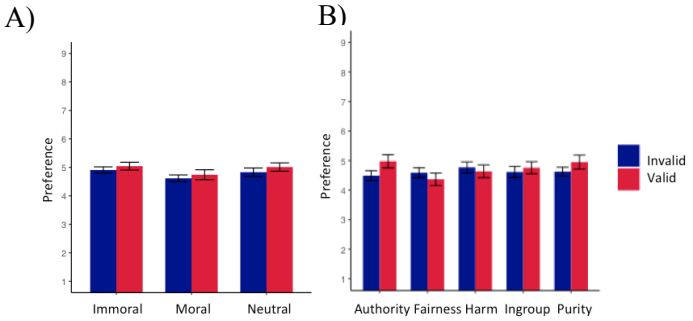

Figure 3. 物品の評価課題に関する結果を示す。A) 顔画像と連合した情報 (道徳違反・道徳遵守・中性) および視線方向の違いによる物品の好ましさを示す。B) 顔画像と連合した道徳違反のサブカテゴリ (転覆・欺瞞・危害・背信・堕落) および視線方向の違いによる物品の好ましさを示す。

引用文献

Bayliss, A. P., Paul, M. A., Cannon, P. R., & Tipper, S. P. (2006). Gaze cuing and affective judgments of objects: I like what you look at. *Psychonomic Bulletin & Review*, *13*(6), 1061–1066.

Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: a social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, *108*(4), 814.

Ma, D. S., Correll, J., & Wittenbrink, B. (2015). The Chicago Face Database: A Free Stimulus Set of Faces and Norming Data. *Behavior Research Methods, 47,* 1122-1135.